

異邦人

江亮一

人 邦

一 亮 辻

文藝春秋新社

異邦人

昭和二十五年十月十五日 印刷
昭和二十五年十月二十日 發行

定價 一九〇圓

著 者

辻 亮 一

發行者

鷲尾 洋 三

印刷者

大橋 芳 雄

印刷所

共同印刷株式會社
東京都文京區久堅町一〇八

發行所

文藝春秋新社

東京都中央區銀座西五ノ五
電話 東京 七四二三四

目次

異邦人……………三

木枯國にて……………一二三

春いづこの里に……………一九五

彼岸……………二三九

あとがき……………二八五

装画……………脇田和

異邦人

人生の景色は棲む場所の何處を問はず常に Exotique である

一九四六年十月初めの或る夕暮、古びたリュックサックを背負ひ、つぎだらけの作業服をまとつた三十前後の日本人が、N市の街はづれにある木枯國共產黨東方軍區第一病院附屬療養所の門前にたどりついた。

彼——丘上博は、だゝつびろい間の抜けた顔の若い歩哨に、作業帽をぬいで日本風に一禮すると、上衣のポケットから一枚の紙片をとり出し、木枯國語で「お願ひします」と言ひながら、歩哨に手渡した。それはK市の後勤部軍工廠から、この療養所の管理課長に宛てた彼に對する紹介狀であつた。

——此の日本人丘上は當廠所屬の炊事夫であつたが、人員整理の都合上、解傭の已むなきに至つた。彼は眞面目な善良な日本人であるから、出來得れば貴所に於て使用されることを望む——

歩哨は紙片に目を通したが、字が讀めないらしく、黙つたまゝ、歩哨小屋の天井からたれ下つてゐる針金を左手で何回かひつばつた。すると赤い煉瓦建の本館の玄關脇の部屋で、がらん／＼と鐘が鳴り、間もなく若い太つた柔和な細い目をした兵隊が出て來た。歩哨が

「分隊長、此の日本人が、手紙を持つて來たよ」と言ふと

「どれ、どれ」といかにもゆつくりした物腰で、歩哨から紙片を受取り、一寸眺めてゐたが、彼も字が讀めないらしく

「返事がいるのか」と博にたづねた。

「はい。私は此の療養所で、働きたいので、軍工廠から紹介狀を頂いて、お願いに來たのです」

「ふうん……ではこれが紹介狀だな」

「さうです」

「暫く待つてくれ」さう言ひ残して分隊長は建物の中に姿を消したが、やがて玄

關まで出て來て、博を手招きした。

管理課長室は何んの裝飾もない狭い部屋で、目につくものは机と二、三脚の腰掛と木の寢臺ぐらゐるものであつた。寢臺の上に靴ばきのまゝやせた脊の高い男が寢そべつてゐたが、二人の姿を認めると、むつくり半身を起し大きな目をぎよろりとさせて、早口に

「お前は飯たきが出来るんだな。ちやう度よい。此の療養所は開設されて日が淺い。忙しいのだ。それにこれから患者もどん／＼増えるだらう。心配するな。眞面目に働く者には必ず衣食住が與へられる。おい分隊長、此の日本人を患者食の炊事場に連れて行け。事務長に話して今日から炊事場で働かせろ」

「有難うございます」と博はうや／＼しく頭をさげた。其の過去を聞かうともしないで、一目、見ただけで、経験のある炊事夫といふ仕事を與へてくれた課長に彼は感謝せずにはゐられなかつた。分隊長に伴はれて、本館の裏口から五十米程離れたところにある患者食の炊事場に行くと、今夕食のあがるところらしく、立

ちこめた湯氣の中で、炊事夫達が右往左往してゐた。人々につきあたらないうちに氣をつけながら、ぬる／＼する床をふんで、炊事夫部屋に入つたが誰もゐなかつた。

「俺が事務長と此處の炊事分隊長に話しておくから、お前はこゝで休んでをれ」さう言つて分隊長は部屋を出た。

細長い部屋の兩側は二尺程の高さの板の間となり、真中が通路になつてゐた。

東側に窓があり、西側は板壁で炊事場と區切られてゐた。兩端に未だ乾ききらない煉瓦造りの粗末な煖爐があつた。

「今日から此處で暮すのだ」博は心にさうつぶやくと、板の間に腰かけて、肩からリュックサックをしづかにおろした。その中には、亡き妻のせつ子の遺髪も入つてゐた。

突然、炊事場の外で、けた／＼しく笛が鳴つた。すると本館の裏口から、待ちかまへてゐたやうに續々と見習看護婦が姿を現はし、こちらに走つて來るのが見

えた。炊事場は一しきり、男女の高い聲や、入り亂れる重い靴音にごつたがへしてゐたが、やがて患者食の飯と豚汁の入つたバケツを兩手にさげた見習看護婦の淡青の軍服姿の行列が、薄暮の中を本館の裏口に消えていくと、炊事夫達がどやどやと部屋に歸つて來た。患者の夕食の配給が終つたのだ。

弱い電燈の光の下で、炊事夫はまるで雲助のやうに顔も服裝もくすんで見えた。頭にソフトを頂き、白い病衣をかつぼう着代りにつけてゐたり、驛の助役のかふる赤いらしやのついた帽子に、麻袋の前掛をしめてゐたり、又徽章のない角帽に、木綿の外套を着て、腰のあたりを幾重にも荒縄でしばつてゐる者もあつた。すべてが、まるで貧しい假裝のやうであつた。彼等は立ち上つた博に、申し合せたやうに無關心に、きまつた自分の席に、思ひ思ひの樂な姿態をとり、唾をはきちらし、しやべり、煙草をふかし、日まはりの種を噛んだ。

暫くして、猫背の小柄な若い男が入つて來たが、博に近寄つて

「お前が今日來た日本人か」ときいた。それが炊事分隊長であつた。

「はい、よろしく願ひします」博がおじぎをすると、彼は如何にもてれくさうに

「いゝとも。あとで事務長にひきあはせるから」と云ひ、炊事夫を見わたしながら

「おい、みんな、この日本人が、今日から俺達の仲間だ」とやゝ聲高に博を紹介した。博が禮をすると、炊事夫はてんでに

「おゝ、よし／＼」とでも言ふやうに大きくうなづいた。

「えゝと：：お前の寢場所はな——片隅でしんばうしろよ。おいモンゴリアンお前のところでも少しあけてやつてくれ」分隊長は部屋の一番出口に近い片隅を指さしながら言つた。其處には驛の助役の帽子をかぶつた實直さうな間のぬけた顔をした男がゐた。

「うん、いゝよ。ちや、キリン少しつめてくれないか」モンゴリアンと呼ばれたその男はおだやかな調子で、隣のやせた背の高いソフトに言つた。

「ちえつ！面白くもねえ」キリンは年に似合はぬし、わくち、やの顔をしかめながら舌打ちし、いきなり自分の蒲團を、隣りの男の席にすらした。間もなく半疊餘りの場所が空いた。

「すまないな」と言ひながら博はきめられた席に移り、リュックサックの中から半べらの毛布をとり出して、板の間に敷いた。モンゴリアンが氣の毒さうに

「狭くても我慢するさ。俺達には家財道具は何もない。結構寝られるよ」とそのたくましい體格に似合はないやさしい聲で言つた。

「狭い方が冬はしのぎ易いよ」

すると博の持物をじろ／＼見てゐたキリンが大きな聲で

「なんだ。こいつも蒲團持つてやがらねえ。おーい分隊長、この日本人蒲團持つてゐないぞ」と面白半分になめいた。

「あとで何とか借りて來てやらあ」

「木枯國共產黨は貧乏で何んでも足りないんだ。蒲團持つてなくつたつて氣にす

ることはないせ。ほら見ろ。この部屋に炊事夫が二十人程ゐるが、蒲團二枚持つてゐる奴はゐないせ。もう直ぐこの板の上に乾草を敷くのだ。乾草が敷蒲團だ」とモンゴリアンが説明するとすかさずキリンは

「足りてゐるのは兵隊だけだあ」とつけ足した。

「お前、女房あるかい」モンゴリアンがきいた。

「ないよ」

「ぢや俺と同じだ」するとキリンが腹をかゝへて笑ひ出した。

「頼馬奴！ お前やこいつに女房があつてたまるか。笑はせるな」

「ぢや、お前にはあるのか」モンゴリアンが笑ひながら反問すると

「あるとも。おまけにおふくろも子供もあらあ。お前なんか知るまいが……これから百里も離れたニキリヒト市にな。れつきとした女房が俺の歸りを待つてゐるだ」と胸をたゝいて言つた。

従業員の夕食の合圖の鐘が鳴り、暫くすると、従業員食の炊事場に飯上げに行

つてゐた角帽が、兩手に重さうなバケツをさげて入口迄戻つて來ると

「米の飯だぞう！」と嬉しさうに叫んだ。

「わあつ！」とばかり炊事夫は歡聲を上げ、いつせいにめい／＼のブリキの食器を手にとつた。分隊長は角帽からバケツを受け取ると通路の中程におろして、炊事夫が次々にさし出す不揃ひなブリキの椀に、久しぶりの豚汁を公平に分配し出した。そこへ背の高い出っ歯の大男が幅の廣い肩をゆすり／＼入つて來て、リュックサックの中から食器を出してゐる博に

「俺が事務長だ。お前が丘上加。やあ御苦勞御苦勞」と云つた。急いで博が挨拶すると「ふん。お前はきつと役に立つぞ。やあ御苦勞、御苦勞、早く汁を貰ひに行け」それから今度は彼は炊事夫達の方をむいて肩を張り、腹をたゝきながら「やあ、仲間の者共！今夜は御馳走だ。大いに喰へよ。一人で五合も六合も喰へ」と出っ歯の間から、唾をとばして高い聲で云つた。

「だが事務長、そんなに飯はないぜ」キリンが上機嫌で、飯をよそひながら云つ

た。

「おゝ、これは失言々々。おい分隊長、丘上にどつさり菜をやれよ。日本人は御馳走喰つてゐないからな」

「あゝ、いゝよ」

「俺達だつて御馳走喰つてないや」キリンが應酬した。皆どつと愉快さうに笑つた。博が顔をあからめながら、差し出す汁椀に、分隊長は豚肉の多いところを探つて、山盛に汁の實をついだ。

「僕も日本人になりたいね」飯をかき込みながら、キリンが言つた。

「よし、きた」と事務長は分隊長から汁杓子をとると、汁の實をすくひ上げて、のつしのつしと歩き、キリンの椀に、汁があふれ出すのもかまはずに、ぶちあけた。又どつと笑聲がおこつた。彼は満足げに、炊事夫が食事する景色に見とれてゐたが、暫くして悠々と部屋を出て行つた。食事がすむと、分隊長が博に

「お前の仕事は米とぎだ。徴用人夫を二人つけてやるからな。米ときと、それか